

「玉ねぎの薄皮を剥ぐ／友人に彼氏ができた時みたいに。」いまはじまるの（兵庫県）
玉ねぎの実のみずみずしさや痛々しさのようなものが、胸のうちの生々しい感情と一致する。言葉とはこのように遠いところにある二つを結ぶものだろう。

「春風を焦がれる彼らの片隅で／まだそこに居たいと／雪だるまも泣く」四ツ目（北海道）
死がある限り、誰もが消えてしまう。つまり、みな「雪だるま」のようなものかもしれない、と私も思っているが、ここまで正面からは書けないだろう。直視する力が感じられる。

「誰なのか知らせなくても／バスはただ／にんげんのため少し傾く」詩央えみる（大阪府）
こういうものをバスの擬人化と捉えるような読み方はもう越えられるべきだろう。もっと本質的な物質の心を聞きたかった。

「いやな花いやな乗り換えの渦中に／小さな声のあいさつ沁みる」小宮 颯人（東京都）
一般的にはあまりいやがられないものに「いやな」とつけることで、よっぽどいやなのだなという強調になるようだ。

「公園でチョコレイトを追い抜いて／パイナップルに追われて逃げて」櫻川 佳子（愛媛県）

最初何かわからなかったが、「チョコレイト」と心のなかで言ってみたところ、なつかしい情景がひらけた。声のなかにはさまざまな記憶が隠されているようだ。

「槍っぽい雨をかついで労働者／なぜ透明になろうとするの」五月閉じ花（北海道）
槍っぽいという雨の描写がたいへん巧みだ。荒く豪快なタッチと繊細さ。どこか絵画を見えるようでもある。

「眠るときの／全てを間違えたと思う儀式」浪花 小楨（東京都）
ああ、あれは儀式だったのか、と思うことの新鮮さ。そして、ありがたさ。こういう言葉が人を救うのかを知っている。

「バス停の椅子には浅く腰かける／バウムクーヘン食べてるまひる」互井宇宙論（埼玉県）
浅い腰掛け方とバウムクーヘンの穴。どちらもどこか落ち着かない感じを伝えてくる。まったく異なる次元のふたつを繋げているところに詩歌のセンスが感じられる。

「ミルフィユ／全部の層にお化けいる」おかもと（石川県）
面白い！ 身近でかつ生々しい断面が提示されているせいか、そこにむりやりにでも「お化け」のすがたを見ようとする力が、読み手のなかで働くようだ。もしかしたらすべての「層」にはこの「お化け」がいるのかもしれない、興味深い。

「花びらの川面は／春の寝姿をかたどり、／浅くオールを入れる」快名（千葉県）
比喩のつくりかたが独特だ。「浅くオールを入れる」のは起こさないように、だろうか。

そのやさしい力の加減までがこちらに伝播する。

「んめ、んまと父はいつてた梅と馬」 鷺浦 るか（富山県）

数ヶ月前から投稿してくださっているが、今回はたいへんな才能に出会った、という印象。かなり長く書かれている方かもしれない。方言のエッセンスで血縁をやわらかく掬い、間と言葉で見えないかたちをびたりときめて、「父」という個を浮かび上がらせている。

次回もお待ちしています。楽しみにしています。